

青山学院高等部出身短大卒業生 聞き取り調査のまとめ

－1965（昭和40）年から1973（昭和48）年卒まで

山田 美穂子

1. はじめに

第1回の調査まとめ冒頭でも述べたように、青短同窓会の会員の中でも高等部卒業生の占める位置はやや特殊である。彼女らの多くは、当時の日本社会においては比較的高学歴の両親と兄弟姉妹を持ち、必ずしも裕福な環境とは限らないが、女子教育をすでにあたりまえのものと考えている、いわゆる教育資本の豊かな家庭環境に育った。今回インタビューを受けていただいた5名の卒業生の実家の職業は自営業が3名、銀行・保険業勤めが2名という経済的に余裕のある社会階層であることは特筆すべきであろう。また家族親族のどなたかが青学卒かという観点で見ると、父が3名、母が1名、姉が2名、という結果であり、少ない人数の中ではあるけれども、異文化や宗教に比較的寛容である東京という地の利を得て、キリスト教という特定の宗教にも特に違和感を抱かず、「青学ファミリー」内においてはむしろ積極的に親から子へとミッションスクールの教育が継承されてゆくさまが伺える。

「青学ファミリー」とは公式名称ではないが、彼女ら当時の高等部卒業生の多くは青山学院高等部から学院大学もしくは短大へと進学し、いずれに進んだ場合も「青山学院」への帰属意識が強いのが特徴である。短大を進路に選択した場合、人数の点では地方出身の学生たちの中でマイノリティ側にならざるを得なかった（たとえば昭和48年には短大への進学者数をもっとも多い児童教育学科でも120名中8名）。そのため、彼女らは地方出身の多くの学生にとって、かえって一種の憧憬の的となったことが地方支部の卒業生への聞き取り調査からは伺える。その一方で、高等部出身の卒業生からは地方出身の学生が地方の名家のお嬢さま、古式豊かで教養のある「お姫様」のように見えたという感想も頻繁に聞かれ、昭和40年代の青短とはいわば、都市と地方の文化・経済的差異が露呈する異文化交流の最前線でもあったのである。

この報告書ではご協力を賜った5名（昭和40年卒2名、昭和46年卒1名、昭和48年2名）の高等部卒業生への対面インタビューを通じて得られた貴重な当時の短大教育の実情と、若い頃の彼女らの目を通して率直に語られた進学・就職・結婚・子育て・介護などのライフイベントへの対応ぶりを概観する。当時の背景にある高度経済成長期を考え合わせると、世間の評価の高い卒業生を10期生（当時）まで世に送り出すに至ったこの時代の青山学院女子短期大学こそは、まさに時代の要請に答えていたといえるだろう。

以下では質問項目別に5名の卒業生（本文ではプライバシー保護の観点から、それぞれ対応するアルファベットで表記する）の回答内容をまとめ、最後に考察を添える。

氏名	卒業年	学科
A	1965 (昭和40)	家政
B	1965 (昭和40)	家政
C	1971 (昭和46)	英文
D	1973 (昭和48)	国文
E	1973 (昭和48)	児童教育

2. なぜ「青短」に進学したか（どのような理由で選択したのか）

Aさんは父（東京）・母（東京）、の長女に生まれる。父自身が青山男子部から経済学部へ進学していた。自営で、宗教にはノンシャランな家庭。Aさんは品川区立中学校から私立の青山高等部へ（弟も私立、妹は公立へ）。

下町育ちなので馴染めるか心配だったが、よい雰囲気であった。ベビーブームで生徒数が多く、多い学年で1クラス50人×10クラスのことも。高等部のとき、短大生が中庭の芝生で食べているのをしばしば見かけ「毎日ピクニックみたい。お姉さんたち、いいなあ」と憧れた。当時高等部には食堂がなかった（高・中・初等部それぞれに校歌に準ずる歌があった）。高等部では聖歌隊に所属した。

短大に進学したのは、父が「四年制の大学に行くとお嫁に行くのが遅くなる」と心配したから。とくにやりたい科目もないし、教科としては数学・化学・生物が得意だったので、短大に進学。当時青短の人气が上昇しており、英文科なら社会的評価は短大の方が四大よりも上と思われた。キャビンアテンダント（CA）、生命保険、銀行、デパートが主な就職先だった。高等部の生徒数は約500人で、そのうち1割が外部を受験（多くが慶應義塾大学と早稲田大学）、短大に進学する人も多かった。

Bさんは、祖父がクリスチャンだったので、こどもの時は日曜学校に行っていた。母は青山女学校の出身。4人兄弟（兄、姉、次女、Bさん）の4番目。兄が進学のタイミングで秋葉原の駅前にベビー用品、防水袋物の卸問屋の店を出した。デパートなどに卸していたようである。隣家が新聞屋だった（競馬新聞も売っていた）。当時は戦後でまだ駅前に戦災孤児がいた。Bさんは千代田区の芳林小学校に。兄は明治学院大学、姉は青山高等部、次女は青山を受けたが落ちて都立忍ヶ丘、自分は公立中学から高等部は青山へ。明治生まれの祖母が学歴を気にして、「順番に、平等に」と言っていたというエピソードにはBさんの家の教育意識の高さが伺える。

高等部では英語の授業が難しくてイヤになった。自分の家の屋号でからかわれることもあった。親は商品デザイナーを希望しており、姉（長女）は女子美の短大に進学。次女は

都立高校から銀行へ就職した（当時三分の二が就職）（仕事内容はほとんど鉛筆削りだったそう）。三女の自分は特にしたいことがなく短大へ進学した。家政に決めたのは消去法で、国文は本を読むのがイヤ、児童教育は出来立てで当時はあまり人気がなかった。高等部の頃は「ワル」（＝問題児）で、当時おしゃれだった東急会館内の喫茶やレストラン、「フランセ」「アスター」「立田野」に出入りした。

Cさんは、父が青山中高部（男女別）だった。山梨出身で中高は青山学院に学び、兵役についた後、早稲田大学を卒業。就職して東京海上に勤めた。母は長崎生まれだが原爆が投下される直前に祖母が貨車で東京に移動していたとのこと。母は川村女学園の出身。目黒区の家は雅子妃の実家の近くである。長女であるCさんは地元の区立小学校に通い、母が教育熱心だったのか、本格的に勉強させる塾へ行き、中学受験をして青山の中等部へ入学。家にキリスト教の雰囲気はとくになかった。

本当は青山の大学に行きたかったが、父が「短大でないとダメ」、勉強してすぐに就職するべきと反対した。Cさん本人は英語を使う仕事がしたかったが、事務職は嫌だと考えていた（街中で歩いている青いスモックを着た女性事務員を見て、「あのスモックを着るのはイヤ!」と思った）。そうすると、私服で働ける仕事は秘書しかない、と考え、卒業後の就職を見すえて青短に進学することを決めた。

Dさんは、出身は神奈川でそこから通学した。3つ年上の姉が「地元ではなく東京へ」と青山の高等部に。自分も自然と青山の高等部に行くことになった。両親は「兄と姉が四年制大学だから同じがよいのでは」「ただ本人が短大を希望するなら自由にしてよい」という雰囲気だった。妹は短大でなければならない、というわけでもなく、通った中学では中卒までの人もいて、過渡期だった。高3の始めに大学への進路希望を聞かれる。第二外国語でドイツ語が面白いとは思っていたが、外部受験の準備はなく不安だった。大学へ行く目的も明確ではなかった。学部を選ぶとしたら、英語にはあまり縁がなく、日舞を習っていたこともあり日本文化への興味があったことから、短大の国文科にしようと思った。1月の最初の登校日に「内部進学試験」（英・国・数・理・社）があったが、とくに受験勉強はしていないまま臨んだ。

Eさんは、父親が銀行員だったため、いわゆる転勤族だった。東京から神戸、札幌、静岡と移り住み、小4からは東京にいた。父も従兄弟も青学で（母は専門学校出身）青学を目指すことに。親の意思で中学受験して青山の中等部に入学。

高等部で進路を決めるとき、第1志望は青学の教育学部、第2志望が青短の児童教育学科、第3志望まで記入せねばならず、英語が苦手だったので第二外国語がフランス語だったという単純な理由で青学の仏文科にした。第1志望が不合格だったので、第2志望の青短に決めた。

青短は当時珍しい5学科制で、とくに好きな学問分野をひとつに決めることができなかった当時、いろいろなことを実地で習える児童教育学科は「お稽古の続きみたいで楽しそう」に思った。

3. 青短に入学してから何か自分に変化があったか。あるとすればどんなところか。 何か影響があったとしたらどんなことか

Aさんは、高等部から短大では特になし。むしろ中学から高等部へ来たとき周囲の雰囲気が変わった。公立中学では成績も良く家は裕福な自営だったこともあり自信を感じていたが、青山の高等部へ来ると毎日クラスごとに礼拝があり、オルガンを弾ける人は担当させられていた。他の皆はピアノが弾けるので担当できるが自分は弾けないので通年お祈り係だった。また他の生徒は「おとうさま・おかあさま」と言っていて驚いた。またファッションも公立より華やかで、当時流行りのサーキュラースカートにペチコートを2枚穿いたり、「ビジネスガールになれ!」と言われて大人っぽいタイトスカートを穿いて注意されたりしたとのこと。

そこへいくと、短大ではすでに「青山」の地に慣れているので安心だった。周囲は地方のお金持ち（デパートのオーナーなど）や医者の娘、といった人が多く、みな「青短に来た」とたいそう誇らしげだったという印象である。

Bさんは、青短で初めて女子だけの環境になり、「すっきり、清潔」な雰囲気に驚いた（男性がいないため恋愛などの人間関係に気をつかわない）とのこと。家政科では実際的な知識と技術を学んだ。たとえば阿部先生の授業で洗濯機の使い方を実験し、綿と化繊の違いや、正しいすすぎ方などを試した。

当時国文学科以外の学科では卒論はなく、それにあたる自由研究に近いレポートだった。近くの工場へ行っても資料をもらい、それを書き写すと合格をもらえたとのこと。

Cさんによれば、当時短大は他大学に人気で、他校との交流が盛んだった。必修科目と重なるなどの不便があり短大の授業では英語不足になると感じたので、学外の英文タイプ学校に通った。洋裁もなったが、小柄であるためなかなか市販の服のサイズが合わず、社会人になってから田中千代の洋裁学校に入り直した。服や靴が当時の日本では合うものがなかったが、後にアメリカでは多様なサイズ展開があり感銘を受けたとのこと。

Dさんの時期、高等部は1学年11クラスあり（女子300人、男子200人ぐらい）、そのうち青短に進学したのは20人、そのうち国文に進んだのはDさん一人だった。入試のあと面談があり、三人の教員（川瀬・加藤・青木先生）から質問を受けた。川瀬先生が「女性は子どもに対して一番影響力の大きい人なのだから、受ける教育が大事だ」とおっしゃったのが印象的だったとのこと。川瀬一馬先生は「私はスーツで授業をします」とも言われた。羽織袴のこともあったようで、教員の真摯な教育姿勢をよく表しているエピソードとして、この類の思い出を複数の卒業生から伺うことがあった。

Dさんにとっては新鮮だった点は、短大の同級生たちが国文の教員をよく知っていたこと。百人一首を教える野村先生、俳句の加藤楸邨先生（1954～74年まで国文の教授）など有名な教授陣だった。

Eさんは、高等部では成績がよくなり萎縮していたが、短大に入ってから、この先進

学するわけではないし、卒業できればよい、と自らハードルを下げたおかげで、自分が自分らしくいられる場所を見出せるようになった。成績を気にせず、のびのびと学ぶことができた。当時の児童教育はやや過保護気味なほど世話見のよい学科で、実習先まで親身に探してもらえたとのこと。与えられたものに一生懸命取り組めば卒業はできる、という安心感があった。当時は卒業要件に幼稚園免許の取得があったため、逆にいえば卒業時には必ず免許が取れていたということで、厳しくはあるが必修の良さがあった。児童教育学科は60人クラスが二組あり、高等部から児童教育学科へは短大へ進学した20人ぐらいのうち8人が進学していた（一クラス4人は他学科と比べて多い進学者数だったのではないかとのこと）。

4. 特に記憶に残っていること（先生、友人、ゼミ、授業、礼拝、学校生活、学生活動、寮、その他）、学生時代の基督教教育・礼拝の様子と、卒業後に与えた影響

Aさんは、短大進学時、内申書に両親の学歴を書くところがあったのを覚えている。短大はとにかく勉強が大変だった。阿部先生が「二年間の勉強で奈良女子やお茶の水女子大学の家政学部と同じレベルにする！」との熱意で、空きコマはなし。

被服のクラスでは和服の先生（渡辺学園女学校（東京家政大学の前身）の出身）が和裁を教え、1年次に単衣、2年次に合わせとスーツを縫うというハイレベルな授業である。自分の母親も東京家政大学の出身であったため、宿題の作成を手伝ってもらったところ先生にバレたこともあった。

野村先生の調理では和洋中を習い、試験では10種類の白い粉の正体を当てさせられた。高野豆腐を作る試験もあった。

他にとった科目は物理（島崎先生）、心理学（四大の授業を聴講に行った）、英語、英会話、英文タイプ（選択）。これは後に就職後、PC導入時に便利だった。

部活は硬式テニス部に所属し、体育の成績はAだった。部員は何十人か、短大だけで構成して活動していた。コーチはオリンピックの加茂選手〔加茂公成。1955年全米選手権男子ダブルスで優勝。日本人唯一の4大会優勝者。父・国夫の指導で選手に〕の父親で、モダンな男性だった。白いハーレー（バイク）を飛ばし、学生に自分を「おじちゃん」と呼ばせていたのには時代を感じる。入部したきっかけはBさんら友人のお誘いだった。当時は美智子さまブーム（1958～59）（の余波）でテニスが流行しており、中軽井沢寮をよく利用した。当時は短大寮の前に三笠会館がありテニスがてら行ったところ「スコート姿ではダメ」と入館を断られたことも忘れ難い思い出である。

家政一年のとき追分寮へボランティア5人で料理を作りに行った（50人分）。当時は土日の連休を使ってどこかへボランティア活動に。青山の大学から男子学生たちがボランティアの世話役に来てくれていた。

1年次は担任制でA・B・Cの3クラス。アドグル（青山学院における「アドバイザー・

グループ」の略称) もあり、一週間の北海道旅行をした。

短大では礼拝が自由参加だった(大学の礼拝堂にて)(高等部ではP S 講堂で毎日礼拝があった)。当時は「受洗すれば成績はAに。聖書ももらえるらしい」というので受洗した。体育館はなく、卒業後にできた。

学外での遊び: 合同ハイキング(「合ハイ」といって、バス一台をチャーターして(バスの中でクイズや歌を楽しんだ) 江の島、箱根、御宿へいった。青山や慶應からのお誘いが短大に張り出されるのでそれに応じた。またパーティ券を売り、毎週土曜日に大手町のサンケイホールでパーティを開催、他大学から大勢訪れた。そのパーティのためのドレスを母親が生地から仕立ててくれたのが心に残る思い出である。

Bさんは、パーティ券を売りさばくことが得意で、短大の硬式テニス部ではずいぶん役に立った。当時は石原裕次郎や若大将(加山雄三)が大人気で、映画の券もよく買った。そうしたポップス歌謡だけでなく音楽なら何のジャンルでも好きで、テノールなどもよく聴いたとのこと。当時の青山界隈の都市文化に根差した洒落な学生生活であったことが感じられる。

洗礼は短大で受けた。両親がYMCAで結婚式を挙げていた(「悪いことではないから」「お酒も飲めるし」と宗教的なこだわりはなかった模様) こともあり、もともとキリスト教に抵抗はなかった。結婚に支障があるかな、とは思ったが、結局在学中に受洗した。自分の中では「クリスチャンは日々の暮らしについての感謝を捧げるのが神様だが、それは相手が仏様でも同じこと。他の信心・宗教を否定するのはよくない」との理解だった。

卒業後の人生においてキリスト教が影響を見せたのは思いがけず婚家でのこと。義母は兄弟が10人あり、夫の従兄弟は40人という家族親戚が多かった時代の典型。結婚先(老舗の蕎麦屋)では「お嫁さんがクリスチャン…?」と戸惑われた。夫が子どもたちに「ママ[Bさんのこと]は本当のクリスマスを知っているよ」と吹聴したので、お茶の水にあったキリスト教の本屋でクリスマスの絵本を買い求め、読んであげたこともあった。ただ、12月24日は神田神社の神主を呼んで蕎麦屋の暖簾分けの儀式を行う日であるため、長らくクリスマスイブを祝うことは難しかった。引退した年はようやくクリスマスイブにお祝いができるので楽しみにしていた。宗派は自分にとって重要ではないので、近くの教会へ行ったとのこと。最近、神田の三崎町教会で祝福を受けた。

Cさんは、短大に徒歩で通った。1970年ごろは大学では学生デモのバリケードが築かれ、院長の大木先生が短大の敷地へ逃げてこられたこともあった。短大では学生デモによる休講はなく、直接に当時の学生運動・安保闘争の余波を受けなかったことがわかる。内心「休講があっていいなあ」とうらやましかった、との正直で貴重な証言が得られた。

第二外国語としてフランス語のクラスをとったところ、クラス全員が苦労した覚えがある。教員は日本人の中年男性で、自分のフランス留学時の出来事などを雑談していた。2年ではもっと大変だった。

英語が担当教員によって違う(イギリス英語とアメリカ英語が混在するなど) ことが気

になり、「よい発音を覚えたい」と思った。ネイティブの先生はシェイクスピア作品も原書で読ませた。古い英語ではあったが興味深い授業だったものの、当時Cさんは学生の本分は実用英語の習得にあると考えており「ネイティブとはいかなくても、下手でも英語で会話ができるようになりたい」と考えていた。そのため結婚後に住んだアメリカから帰国後の40～50代で英会話学校で学び直した。

部活は中高では軟式テニス、短大ではまたテニス部に入ったが、コーチがおらず強い先輩もいないので弱いチームで、成城大学や成蹊大学などの強い学校に勝てなかった。テニス合宿で軽井沢へ行った。当時、三笠会館の前に青山学院の合宿所があり、コートとプールが備わっていた。段々ベッドで自炊、自転車を借りることもできた。

短大の学食はコンクリートできれいな建物だったが、メニューが少なかった。お弁当を持っていっても中庭は狭くて座れず、四大の学食へ食べに行ったりしていた。

中高の友人は四大にいたので、そちらに遊びに行くかテニスコートに出向くことが多く、短大の校舎にあまり留まっていなかった。

「英語を神聖視せず実際に使いたい」と強く思い实际的な英語を学びたかった。日本では正しい英語をしゃべらないと恥ずかしい、という雰囲気があるが、アメリカでは伝わりさえすればよい。たとえば日常の子育てにも語学力は必要なのに、習った英語では全然英語ネイティブに通じない。授業以外に英文タイプを習ったし、休みには渋谷へ洋画を観にいった英語を吸収しようとした。『アラビアのロレンス』『サウンド・オブ・ミュージック』『ローマの休日』など、スラングが使われていない正しい英語を直感的に覚えていった。

Dさんは、国文では全体の研修旅行があり、奈良（三井寺）へ夜行バスで三泊したことが印象的とのこと。名だたる教授がガイドを務め、川瀬先生が学生全員に赤福を配られたのが思い出される。

アド・グルは参加任意で、教員や同級生と交流を図るアド・グルデーがあった。国文で源氏物語が専門の Kouchiyama 先生のゼミに参加。追試も受けたが普通のことであつたし、若くて親しみを感じていた。

ゼミは俳句の加藤楸邨先生のゼミ（10人程度）に入った。同級生には『源氏物語』を全巻読んでいる猛者もいて、俳句であれば自分でも勉強が可能と思った。卒論のテーマには松尾芭蕉を選んだ。

礼拝は高等部では毎日必須だったが、短大では自由参加に。反動でか一回も出席しなかったし、「キリスト教概論」は覚えていない。バイトはしなかったとのこと。姉のアドバイスで「部活には入ったほうがよい」と言われ、サークルは大学のアイススケート部に、大学に進学した高等部の友人と共に入部。後輩も1人できて、品川のスケートリンクに練習にいった。部員はほとんど男子で（主にスピードスケート、他にフィギュアやホッケーも）、女子の先輩もいたので一緒に筋トレをし、外苑前の絵画館までランニングした。

高等部ではミニスカートの時代だったが、短大ではそれに加えてパンタロンやホットパンツが流行し、部活のときホットパンツ姿でいるとヒューヒューと囁かれたとのこと。大

学の方では、毛皮ブームに乗って実際に毛皮を着ている学生もいたのには驚いた、とも。こうした学生生活のディテールは、70年代の都市部にあった大学の様子を鮮やかによみがえらせる貴重な証言である。

学食はうどんが60円だった思い出。学外では甘いものを食べるのが楽しみ。「スイス」(喫茶?)、「千果園」でかき氷やアイスクリームを、映画館に併設の「東宝パーラー」や「ユーハイム」でソフトクリームを食べた。映画も楽しみで渋谷東急、名画座、渋谷ホールの向かいにあった渋谷全線座などで洋画『ロミオとジュリエット』『ローマの休日』などを観たことが記憶に残っている、とのこと。

Eさんが入学した頃は、1期生の方が副手を務めていたり初期の教員が残っていたりして創設初期の雰囲気がよく残っていた。児童教育学科は各分野の教授陣が充実していて、音楽・美術・体育・社会・自然観察などに立派な先生方が配属されていた。「幼児教育特別研究」の高橋好子先生、油絵の掛井五郎先生、多和先生のダンス、瀬田貞二先生・神宮輝夫先生の児童文学など。児童教育学科では当時「子どもの教育だからって(子ども向けの)お遊戯や折り紙をしなくてもよい」「本物を見なさい!」としきりに言われたことが印象的だった。事実、ピアノなら芸大の先生方の個人レッスンがあり、美術なら油絵、糸鋸を使って板一枚から木のおもちゃを作り上げる工作も学生にやらせてくれたことはほんとうによい刺激だった。この授業料で、こんなにいろいろなことを体験させてもらえるのだと感激だった。必修科目が多く、実習は2単位など単位数が少ないので授業数が多かった、それでも2年間で90単位以上とったので、ほとんど毎日授業の学生生活だった。

卒業にあたっては卒業記念の学科全体発表会があった。

保母資格は専攻科に行かないと取れなかったので専攻科へ。福祉が専門の先生について学んだ。御殿場で合宿もした。保母の資格をとったのは専攻科生20名のうち14名。保育の仕事につこうと思っている人たちは学びに対して真剣に考えていて、まぶしい気持ちだった。勉強は苦手だが、パフォーマンスの企画のような遊びの要素があることは好きで率先して行動した自分への「いろんな人がいてよい。(あなたのような)宴会・リクリエーション要員も必要だね」という先生からのお声掛けを、当時は慰められたんだか貶されたんだか、と思っていたが、今となっては自分の素質を言い当てておられ印象的である、とのこと。

当時習った先生では、心理学の先生が同窓会で再会したときに覚えていてくださったのには驚いた。自然観察の柳先生はNHKで造園を教えていらした。瀬田先生の授業を受けたくて児童文学の科目を選択したが、絵本製作は難しくてお粗末なものしか出来ず黒歴史だとEさんは謙遜される。瀬田先生はたくさんの絵本を紹介してくださった、学生には優しい方だったという印象とのこと。

礼拝は出席ゼロ。ミッションスクール出身ですでに受洗ずみの人もいた。中高では必須だった反動で一回も出ず。ただ、中等部では日曜日に近くの教会へ行くことになっており、その教会が同窓会運営委員としてお会いした吉岡康子先生(元青山学院女子短期大学宗教

主任)の当時おられた教会であったことはうれしい偶然だった。

部活は短大卓球部に所属した。当時四大の方の卓球部は1部リーグで強かった。短大は5部のリーグでのんびりと楽しむ感じ。高等部の先輩がいたので入部した。同期は全員違う学科からのメンバーなのも青短らしさがあって面白かった。

アルバイトは郵便局本局の仕分け、銀座三越のマクドナルドのバイトなどもあった。短大本科の頃は事務所前に貼り出されたアルバイト募集で見つけた、保護者会の間の子ども預かり担当もして、いわば託児所の走り。青学幼稚園のお泊り会で高等部の追分寮に付き添いバイトでいったことも。結婚後は生協の託児所も早い時期からやっていた。高校から、当時まだ珍しかったエレクトーンを習っていたのでヤマハの幼児教室の産休補助も。ヤマハ系列の楽器店からは正式に就職しないかと誘われていたが、そうになると専門である幼児だけでなく大人にも教えなくてはならないとのことで、仕事が夜にかかるのは気が乗らなかった。幼稚園に勤めたとも言える。2年のときから幼稚園免許をとらなくても卒業できるようになった。

当時は100円で観られる名画座があり、渋谷全線座(1956~1977、洋画専門のロードショー館)で『ローマの休日』を観た思い出がある。

(高等部出身者のみへの質問)

地方出身の同級生に対する(当時の)印象はどうであったか。そしてどんな交流をしたか。

Aさんによれば、短大で地方の方とも知り合いになれた(家政では、クラスの40人中、高等部出身は2~3名だった)。席が後ろの方と誘い合ってクリスマス会に出たりした。その後クラス会でも20人くらい集まった。

一方Dさんによれば、地方出身の人から、食堂に誘ったときに「私たちはあなたたちとは違うから」と言われたことがある。

[地方出身者から見れば、高等部出身者は東京(青山)の都会的な生活・文化的な豊かさに馴染んでいるが故の余裕があり、また高等部出身者同士ですでに固い絆が出来上がっているように見えるために、憧れと裏腹に排他性を感じていたのかもしれない。]

シオン寮(生)についての印象があれば。

Cさんによれば、短大でテニス部に入ってきた友人は地方出身者でシオン寮生だった。休みに実家に帰るのを楽しみにしている友人たちを見て、「地元」がない者は寂しく感じた。

Eさんによれば、寮生の方とは特に親しいお友達は出来なかった。「私たちはあなたたちとは違う」と言われたことがあるが、当時の年齢ではチャラチャラして見えたのだろうか、とのことである。以下、Eさんの回顧より。

卒業後出会った人にはおひとり、シオン寮生だった人がいた。子どもがまだ小さいときに近所に越してきた方で、向こうの子どもさんが少し年上だったのでいろいろ教えて助け

てもらった。もう少し子育ての手が離れたら親しくお付き合いしたいね、とお互いに言いあっていて、ずっと友達になりたいと思わせる方だったが、そのうちに病気で亡くなったことがとても残念だった。青短の卒業生は、いろんなことを受け入れるのが上手だと感じる。全然知らない人でも卒業生だとすぐに分かり合える方が多い。同窓会で会う方はみんな優しく、それでいてしっかりとした頭のよい方たちばかりだった。

地方の人からは都内の人は冷たい、と言われることが多かったが、バリアを張ってしまうところ、あまりプライベートに踏み込んではいけない、と思ってしまうことがあるかも[と自己分析されていた]。

当時はお互いに住まいを聞いたり出身校を聞いたり、それで自発的に名簿を作成したりしていたそうで、個人情報に過敏な昨今の状況と比べると隔世の感がある。今ではラインでつながっているの住所などが特段必要なくなったとも言える。今では地方出身者も含めたグループラインを楽しんでおられるとのこと。

5. あなたにとって青短とはどんな場だったか

Aさんは、一番楽しいとき。短大～結婚までがベストだったと述懐される。

Bさんによれば、同窓生には気さくな人が多く、お友達になりその後も交友が続いているとのこと。2年前に東京新聞に取材掲載されたことも。クラス会も盛んに行っている。

Cさんは、休み時間がなく、勉強で忙しかった。受けたい授業がすべてあるわけでもなかったと回想された。

Dさんにとっては、先生から受ける印象の大きい2年間だった。川瀬一馬先生の『花伝書』はまだ手元にとってあるとのこと。就職はしなかったが、卒業後声をかけられて学科の助手になり、入試の手伝いをしたことも。同窓会運営委員としても参加した。

Eさんは、高等部では、親の意思で受験して入ったため自分の居場所だとは思えない違和感を抱いていた。短大にきて、自分の居心地のよい場所を見つけた気がしたとのこと。「すごく落ち着いていられる場所。人間関係も悪くなかった。」そういう落ち着いた環境にいられてうれしかったと率直な思いを話してくださった。

6. 卒業後の進路について、どのように決めたか

Aさんは、父親が工場経営だったのでなじみがあり、自動車が好きなので「いすゞ自動車」に就職。大森で家から近いし、短大に求人がきていたので受けたら（当時は高卒者しか入社試験は受けなかったの）トップで合格し、（もう一人は東大出身の転職組だったとのこと）縁故でないのは珍しい、と驚かれた。16歳で運転免許は取っていたので駐車場からクルマを出すなど。周囲は四大卒の男性ばかりでお茶くみの毎日。そこに2年半勤めた。当時は短大を出たら22～23歳、花嫁修業をして遅くても25歳までに結婚しないと、26

歳では声がかからなくなると言われていた。

その頃父親が自営の先行きを心配して薬局を併設開店した（3年続けた）ので会社を辞め、薬局を手伝うことに。

Aさんは運転の腕をいかして現金問屋へ運転していき、買い付け、仕入れ、配達をした。当時外で働く女性は珍しかったので、エンストをおこしたりすると男性が寄ってきて助けてくれたし、免停になったときもお巡りさんが優しく許してくれたりと女性であることで優遇される場面もあった。当時は戦後のアメリカナイズされた文化で、男性が「レディー・ファースト」だった。

しかし仕事の場合が自宅になると息苦しくなる。「ずっと家ではイヤ。仕事をしたい！」と新聞で募集をみつけて外車の販売店に転職。薬局は居ぬきで売却した。

結婚は遅めで、28歳のとき、クルマ好き同士の外車販売の社員と。向こうが30歳になるまでは独身でいたいと言うし、こちらも大勢男友達がいいたので親にはその一人だと思われていたらしく、どんどんお見合い話を持ってきていた。夫の姉が早とちり、商店街のおじさんからも「向こうが聞き込みにきたよ」。向こうの親戚が結納を持ってきてしまい、「次男なので」と向こうの親が結婚後の家も探してくれて外堀を埋められた感じ [とユーモラスに語られる]。当時はお見合いが普通だったので、とのこと。

Bさんは、結婚相手は中学校の同級生だった人。同学年だがクラスは違い、クラス委員の仕事のなかで知り合った。その後夫は別の高校へ、Bさんは青山の高等部へと進んだ。登山が共通の趣味だった。

商家に嫁いだのだから「30人の社員たちと社長家族と一緒に」暮らしを一から教わろうと義母と同居して、義母には喜ばれた。料理が楽しいのは家政科の教育のお陰ではないか。義母が102歳で亡くなるまで看取り、その後ようやく夫婦で旅行することもできるようになった。

実家が杉並区に移ったため、会社のある日暮里までBさんが運転手代わりに父を送迎することになり、個人レッスンをつけて恐々だった自動車免許をなんとか取る。店の仕事で蒲田の店に配達に行くなど会社の仕事も手伝っていた。1965年、東京オリンピックの年、その4年前にヨーロッパからアメリカに2か月旅行していた父は「これからはゴルフ・車・パートさんなど新しいことを学ぶ時代だ！」とゴルフに打ち込み、息子[Bさんの夫]を麺類組合の旅行の世話役として同じくヨーロッパ・アメリカに行かせたらすっかり外国風のマナーが身について、女性の椅子を引いて座らせてくれるので驚いた（「〇〇くんがイスをひいてくれた！」）。経営者層のゴルフは高度成長期を連想させるスポーツである。

夫は卒業後京都へ修行に。夫の修行後26歳で結婚。仲人は当時の千代田区長だったとのこと。当時社員は集団就職で地方から出てきた若い人たちが働いており、お店の経営は人材教育などなかなか難しいもの。[Bさんのように] 商家の生まれでないのに、出入りする人に自然に挨拶することなどいろいろ難しいことがあった、と自己分析なさっている。

とはいえ、蕎麦屋の仕事をしながら子どもを4人育て、しかも今で言う「ワンオペ」で

ある。夫は外回りを担当するので、職人は男性の領域だが、社員を教育するのは「おかみさん」の役目で、これが大変だった。集団就職の中学生たちは礼儀を知らない状態で指導が大変だったため、次第に人材はパートの主婦へと移行していった。

Bさんご自身の子どもは男1人、女3人。その長男が伝統ある蕎麦屋を継ぐことになった。次の世代が継がない家もあるので、店を継いでくれたのはうれしいことだった。夫はこの35年間、町会長で外周りに明け暮れ家に不在であることが多かったので子どもの教育はBさんと義両親が引き受けたようなもの。息子には「健康で人に害さえ与えなければ、恥はかくけど、あとは外の人と地域の方が教えてくれる」という教育理念で臨んできたという。

Bさんのこうした発言は神や世界に対する無条件の信頼を感じさせ、また商家独自の「人に磨いてもらう」という人間関係の感覚が伺える。今でも息子が同じ建物の違う階に同居してくれているとのこと。孫の名前を決めるのも息子夫婦にまかせたところ、食事の場をよい香りで豊かにする柚子にちなんで「ゆず」と名付けられたことは喜ばしいことである。

Cさんは、当時の短大生がみなやっていたように就職課で張り出してある求人情報をチェックしていた。1年のころから他の学生も皆求人情報には強い関心を持っていた。英語が使える会社、というのが第一の希望条件だった。

就職試験の面接で「うわっぱりを着なくてすむ部署がいいです」と発言して、「えっ、そんなことが関心事」と驚かれた。三菱商事、住友商事などを希望していたが倍率が高く、三菱石油に入社した。たまたま青短の先輩が退職するタイミングであったのが幸いし、役員付きの秘書の一人になることができた。

卒業後、春休みに研修（1～2週間）があり、青短の先輩に会った。助言として「とにかく行儀よく」「スケジュール調整が大事」「社内情報を漏らさないこと」を注意された。仕事は面白く、外資が入っていたため外国人の上司が2人いた。彼らは個室の出入りに厳しく、必要な書類も情報をもらえないので作成が困難だった。

1974年に退職し、つきあっていた男性（青学の法学部出身。テニスのダンスパーティ券を売った友人のつてで知り合った）がアメリカへ行くことになり、そのタイミングで結婚し退社した。夫になる人の親戚（叔父叔母）が日系2世でアメリカ在住だったので、アメリカで結婚式を挙げた。夫は英語留学の体だったが、すぐに雇われ、歯科医療機械の輸出入の仕事についたとのこと。アメリカが移民受け入れに寛容だった時代もまた隔世の感がある。

Dさんは、実家は平塚で農業機器の販売をする商店で、兄と姉は就職（兄は一人暮らし、姉は実家から通勤）、Dさんは2年間家事の手伝いをしていた。このころ短大事務から連絡があり（就職していなかったからか）国文の副手を依頼された。

卒業後2年たったころ「日刊アルバイトニュース」を見て応募し、生命保険会社へアルバイトに入り、その後社員に昇格した（支部長付きの事務処理）。

25歳のとき青山のスケート部で知り合った男性と結婚。働かなくてもよい、という取り決めて専業主婦に。ただし転勤が多く、宇都宮、沼津、福井と転勤が続く。子どもは男の子1人。

Eさんは、幼稚園に勤める自信はまだなく、もう1年ゆっくりやろうと専攻科に進んだ。保育園や病院の実習見学（乳児を見せてもらうなど）をしていて、現場に出たくなった。専攻科では、家政科があるおかげで、その授業で作ったスポンジケーキを流用させてもらえ、おやつを自分で作る課題はあったもののクリアできた。「小児栄養」の野村先生の影響が大きかった。

これは笑われるようなことだが、と前置きをして、自分は牛乳が嫌いなので、お弁当時間に牛乳を出さないところが求職の条件だったと真顔で言われるユーモラスな一面が見える。専攻科の友人はそれぞれ、幼稚園、保育所、養護施設などに就職した。地元に戻って地元で就職した人もいる。

良い就職先であったが、当時の風潮では短期間で辞めていくのがふつう、という感覚だったので、3年間勤めたあと後続の後輩に譲り、短大の学生課の事務で5～6年バイト。当時は職員がみな短大卒の人たちでよく受け入れてもらえた、気持ちの良い職場であった。

ご自身の結婚については「残りもの同士」で結婚することに、とこれもユーモアを交えて語られる。もともと小さい頃に静岡で近所に住んでいた知り合いだったとのこと。気が楽でよかったのかも。自分は中学から父が東京に転勤したため、その後は会っていなかったが、実はむこうも中学から転勤で東京に来ていたとのこと。

7. 同窓会の二本柱「生涯教育」「ボランティア」に関する補足

Aさんは、子ども（女1人）の子育て中は専業主婦だったが、「これまでの勉強や頑張りがもったいない！」と思っていた。子どもが中学生になると通信教育で簿記2級をとり、個人経営の会計事務所に就職。十数年勤め、父の工場の手伝いもした（英文タイプが役に立った）。

その後、青短同窓会の運営委員に。当時は会報の校正も手作業で大変だった。

60歳を過ぎて色鉛筆で絵を描きだし受賞経験もあるとのことで、驚くべき多才ぶりを発揮しておられる。銀座の画廊でグループ展や個展を開催したこともおありである。

Bさんにとっては、ロータリーの国際交流も大きな仕事だった。夫がロータリークラブで引き受けてくるので、留学生のホストファミリーにもなった。アメリカ・ヨーロッパ・東南アジアからの留学生を多いときは8人も引き受けてきたが、80歳になったので引退なさった。家業があったため専業主婦とは違い、自分の子どもや留学生にベッタリと密着して世話できない環境であったことが、かえってボランティア活動との両立にとっての好循環を生んだ可能性がある。かつての留学生たちはいつまでもBさんを「日本での母」とし

て慕ってくれて店の手伝いに駆けつける人もいたそうだ。青短同窓会のクラス委員も引き受けていたが、あまりの多忙さに一度友人に代わってもらったこともあるとのこと。今は専業主婦になって3年目で、夫がゴルフの帰りに珍しい新鮮な野菜を買ってきてくれ、その調理方法に悩むなど毎日を楽しんでおられる様子がうかがえる。

Cさんは、1980年代に保険外交員の仕事をしていたが、自分が化粧品にかぶれ肌のトラブルを経験したことから、国産の自然化粧品の販売にかかわるようになった。

過労から身体を壊したときがひとつの転換点だったようで、自分がよくなるためにいろいろ独学で勉強をしたとのこと。そのなかでたまたまアロマセラピーの先生を紹介されたことがあった。その方の影響で、「人間には自分の中のバロメーターがあるので、おかしいな、具合が悪くなるな、と思ったら本能的にそれから離れるもの」と考えるように。1999年には自らアロマセラピー・マッサージの店を起業し、自由が丘にサロンを開設した。先のモットーに従い、電気や機械は一切使わない施術で現在も経営中である。2009年から青短同窓会の役員を二期務められた。

ボランティアに関しては、まずは息子が幼いとき（33歳のときに出産）地元のバザー・キャンプのボランティアをした。また、地元の親たちによる青少年委員会にかかわり、学校の校庭を使わせてもらって自然活動を行うのを支援した。保護者ボランティアを息子のサッカー部でやった経験も。

その後も環境団体にボランティアで参加し、水質汚染の問題に関する視察でトルコ・カザフスタン・オーストラリアなどへ出掛けしている（砂漠緑化プロジェクトに関する資料をご持参くださる）。カザフスタンではフランス語を話すことに。現地の市場では地元の川で獲れた美味しい魚や新鮮な肉が売っていた。その場でおばさんの料理を食べさせてもらうと、水の少ない土地で育ったインゲンマメの美味しさが印象的だった、とのこと。

Dさんは、同窓会支部総会に伺ううちに、後から「青山短大はよいものだったんだなあ」と実感するようになったという。最初は軽い気持ちで入った短大だったが、いろいろな人との出会いがあり、たった2年間なのに学校のカラーは大きい。クラス会は一度もなかった。今の学生さんは就職のことは頭にあるのに、社会への貢献・奉仕の意識がないように思われる、との忌憚のないご意見も出た。筆者にとってはむしろ、Dさんの世代の方々の人生は、卒業後も必ず社会への関わりがあるのが印象的である。

Eさんは、結婚後、同窓会の役員になる。子ども（女2人）の学校のPTAの会計係も引き受けた。

2011年の東北地震の際も、宮古の青短の学生ボランティアに5～6人で付き添い、カレーなど学生さんのためのご飯作りのヘルプに行った（賛否両論あったことも承知のうえ）。

8. (いま振り返って) 自分の人生にとって「青短」とは

Aさんは、すごく良かった！と断言される。運営委員を務めたことで今でもお誘いがあり、この年齢になると有難いことで、入ってよかったなと感じるとのこと。青短の卒業生だと、年代が違ってすぐには仲良くなれるのが特徴だと思うと述べられた。

Bさんは、「すっきりと清潔なところ」が印象的とのこと。女子だけで、また親のおカネですべて賄われた何の心配もない環境のもと、「ピュアな存在でいられた2年間」であった。とにかく「18歳から20歳ですもの、思えば自分も輝いていました」と、輝かしい時間と場所だったことが強調される。

Cさんは、あとから思えば、青短での二年間がその後すべての基礎のきっかけ作りになっていた、という。「わからない」「何かの助けになるようなことをしないと」という思いに突き動かされて己を高め、違う環境に飛び込み、挑戦を重ねた。そうした卒業生たちの努力の上にある青短の社会的評価の高さには誇りをもっておられることが言葉のはしばしから伺えた。

Dさんは、同窓会支部総会に何ううちに、後から「青山短大はよいものだったんだなあ」と実感するようになった、とのこと。このように、思い返して当時は気が付かなかった青短の気風のよさを述懐なさる方は実に多い。

Eさんによれば、青山の高等部では当時から名簿は男女別ではなく一列だった。男女共同参画などのスローガンが掲げられるよりもずっと早くから、男女平等が実践されていた。短大を選んだのは自分であり、親の意見を採り入れずに自主的に短大進学を決めたことはささやかな自信になった。自分の判断は間違っていなかったなあ、と思う。ふり返ってみれば、いいところだった、と繰り返された。この後、共にインタビューを受けておられたDさんも参画してコメントを足してくださり、青学卒の方は優しい、ふわっと包むような感じがある、と述懐された。一致した意見として、とくに青短の卒業生に優しい気がするとのこと。当時の青学から見れば、やはり青短は「お嬢様学校」という特別感があつたのかもしれない、という推測は校友会での男性卒業生の発言からもしばしば察せられることである。

9. まとめ (考察)

今回の卒業生が就学期を過ごした1960年代後半から1970年代にかけての高度経済成長期は日本社会における女性の教育と就職のあり方に大きな影響を与えた。彼女らはいずれもこの時代に青短という社会的評価の高い短大に進学し、卒業後に就職や結婚を経験している。進学の動機を見ると、いずれの場合も家庭の教育観や親の意向が強く反映されていることがわかる。たとえばAさんは父親が「四年制の大学へ行くとお嫁に行くのが遅くなる」と心配したため短大を選び、Cさんも父親が「短大でないと。勉強したらすぐに就職する

べき」との意見だったことが短大進学契機である。またDさんの家庭のように「姉妹は大学、妹はどこでもよい」という進学格差が見られる例もある。ここからは、当時の女性に対する「早期結婚」や「家庭に入ること」の期待が高かったことがわかる。

また就職に関しては、Cさんの「秘書なら私服で働ける」、Eさんの「昼食時に牛乳を出さない幼稚園を希望」「夜まで仕事が及ぶのは好ましくない」など、職場環境や働き方の条件に対する細やかな希望が語られており、女性が職場を選ぶ際の、男性目線とは異質な目線が興味深い。

ジェンダー的観点から見れば、Aさんの就職先である国産自動車メーカーはやや異質である。当時の短大卒業生の就職先がキャビンアテンダントや生保・銀行・デパートの事務職といった女性向けのものに限定されていた折に、四年制大学卒と高卒女性しかいない自動車メーカーでお茶くみに従事したことは、Aさんの受けた短大教育の専門性と幅の広さとは相反するが、むしろ教員が植え付けた実践知と柔軟性が発揮されたものと考えられるべきだろうか。女性社員が珍しいので男性社員から大事にされた、というユーモラスなエピソードも女性社員がある種の「お客様」扱いであったことを示している。また、Eさんの「女性は短期間で退職するのが世間で一般的だったため、幼稚園を三年でやめた」という証言もあり、女性の職業キャリアは結婚までの一時的な状態、と見なされていた当時の雰囲気わかる。

今回の卒業生から見た青短の教育の特徴は、実技と体験重視のカリキュラムであったことが多くの事例でわかる。児童教育学科では芸大の教員によるピアノ指導、油絵や木工を教える美術教育、自然観察や実際に翻訳を手掛けた研究者による児童文学の講義など、極めて専門性の高い授業が行われていた。Eさんの記憶には「子どもの教育だからって（子ども向けの）お遊戯や折り紙を習っていたはいけない」「本物を見なさい」と繰り返し言われたことが焼き付いており、当時の標準的な幼児教育とは異なるレベルの真摯な教育理念と姿勢が伺える。

また家政科では和裁や調理、物理などの科目があり、生活に密着した知識が得られる体系的なカリキュラムである。児童教育学科では当時はまだ卒業要件に幼稚園免許の取得が含まれていたことも実に実践的である。学生たちはこうした教育を過度な成績へのプレッシャーから解放され「安心して学べる場」と認識しており、短期大学という教育機関が当時の女性にとって確かな居場所として機能していたことを伺わせる。

この高等部卒業生へのインタビューの特徴として、東京出身者と地方出身者との間にある距離感や文化的な差異が繰り返し、(小さな声で)語られることが挙げられる。たとえば同時にインタビューに答えていただいたDさんとEさんのお話に共通して出てくる「私たちはあなたたちとは違う」と地方出身の学生に言われた体験や、「寮の人たちは（やはり同じところで寝食を共にするため）すでに結束が固く、「すごく」仲良くはなれない雰囲気だった」という言葉から、地方出身者と交流する際には心理的バリアがあったことが伺える。当時の青短の空気的一端を知るうえで、大変に貴重な証言をいただいた。

一方で、卒業後に地方出身の同窓生と親しくなった例も散見され、先に挙げたDさんも、のちに民生委員として地元を回っているときに青短の1期生との出会いがあり「お互いが同窓生とわかると瞬時に受け入れてもらえる得難い体験」をしたと述べている。同じくEさんも、子育て中にある同窓生と偶然に出会い、世間的な利害なく「ずっとお付き合いしていきたいと思わせる」体験をしている。「青短の卒業生はさまざまなことを受け入れるのが上手」「(私以外は)優しいが頭の良い人が多い」という言葉からは、若いときに学びの場を共有したことによるある種の連帯感が育まれているように感じられる。

結局のところ、東京出身者と地方出身者の二者の違いは生活文化や教育環境、家庭の価値観などの相違に起因するのであり、短大という教育の場の力と当時の短大構成員たちの「本物を教えたい」という強い理念が、それらの違いを乗り越えさせる成長と変容を卒業生にもたらしたと言えるだろう。

彼女らの進路は幼稚園教諭、保育士、事務職、保険外交員、起業家など多様である。中にはCさんのようにたゆまぬ勉強の末に自ら起業し、現在も経営にかかわり続けている卒業生もいる。また民生委員やPTA、地域のボランティア、環境団体の活動への参加、震災被害地への支援ボランティアなど社会貢献活動に積極的に関わっている方が多いのは特筆に値する。Dさんが同窓生と邂逅したきっかけであった民生委員は、長く地域と行政をつなぐ市民本位の福祉の担い手であり、女性の社会活動の先駆けだった。

あるいは本短期大学は同窓会活動が当初からきわめて活発で、それは専業主婦として子育てを終えた後に運営委員を経験されたAさんのような方の献身的な貢献に負うところが大きかった。会報作成、バザー運営、中軽井沢寮でのキャンプ企画が実現される一方で、彼女らの多くは子どもから配偶者、両親・義両親まで、自身の家族のケアも引き受けている。

伝統ある老舗の社員教育を一手に引き受けながら青短のクラス会を主宰し、地区の青年を国際交流へとつなぐロータリー事業にも献身的なBさん、個人的に世代や職種を超えた「潮干狩りの集まり」(海浜公園に舞台を移した知り合い同士を招いてゆく有機的な交流イベントの場)を主宰する包容力が印象的なEさんなど、卒業後も青短との、また社会とのつながりを出来る範囲で、大切に維持している姿が印象的である。そしてきわめて個人的な感想ではあるが、偶然おふたり1ペアでインタビューに応じてくださった方々はいずれも、性格や考え方は異なっても互いの個性と人生観を尊重し合っておられた。過度に相手の領分に踏み込むことは避けながら、温かく相手を見守り共感し、必要なときはさりげなく助けの手を差し伸べる、洒脱で柔らかな都会性とでもいうべきものを筆者は絶えず感じていたように思う。

こうして、今回の高等部卒業生インタビューもまた、青短の存在の大きさと意義深さに関する発見に満ち、お一人お一人が個性的でありながら青短の理念を実現する短大のかけがえのない財産であることを痛感させた。この貴重なインタビューを通じて私たちは、青山学院女子短期大学が、東京／地方、サラリーマン家庭／自営業、クリスチャンホーム／

非クリスチャンホーム、など多様な背景を持つ女性たちが交わり、長じて「シスターフッド」を築くような精神的成長を遂げるための種が蒔かれる場として、確かな存在意義があったことを知る。そしてまた、青短が単なる有能な労働力（職場においても家庭においても）を養成する教育機関ではなく、生涯にわたる豊かな人間関係と社会参加の礎となってきたことを知るのである。